

● 『ガイア理論』の科学者ジェームズ・ラブロックに聞く

人類が脅かしているのは地球ではなく人間の文明だ

ジェームズ・ラブロックは、独創的な思想を持つ現代でもっとも有名な科学者の一人だ。1919年イギリスのハートフォードシャーに生まれた彼は地球物理学という分野の生みの親であり、現代人がエコロジーに関心をよせるきっかけを作った人物である。

そのラブロックは、ガイア理論を発表して議論を巻き起こしたことで知られる。地球は生物を住まわせるだけの、岩石と土壌でできた不活性な球体ではなく、自ら適応し調節する『生き物』であるという理論である。本誌のケン・シュルマンがラブロックに話を聞いた。

----あなたはしばしばエコジストを『善人だが無知だ』と評しているが。

それは、自分がやっていることの意味を理解している専門科学者としてのエコジストについていっているのではない。大衆的なエコジスト、つまり欧州で緑の党などという言葉掲げて活動している政治的エコジストのことだ。彼らはたいてい、科学について絶望的なほどに誤っている。

彼らは化学物質なら何でも悪いと考えているようだが、ありふれた塩や砂糖やタンパク質、さらには彼ら自身の体内にあるのも化学物質なのだということに気づいていないようだ。あまりに無垢で単純な発想だ。

----彼らは原子力に対してもそうか。

これも政治的な思い込みだ。左派勢力は冷戦時代の考え方を引きずっている。彼らは原子力は何でも悪いと思い込んでいる。しかし自然に起きているものではないという点では、石炭や石油といった化石燃料を燃焼させるのに大きな違いはない。

----最近の地球の気象が劇的に変化したのは人間のせいなのか。

私が尊敬する気候学者の95%は地球温暖化の責任が人間にあると指摘している。これを聞けば、我々が異常現象を招いていると結論を下せるはずだ。

----こうした過ちを人間がたやすことができるか。

ほぼ無理だと思う。欧米諸国のいずれかが、自家用車の使用を禁止することなど考えられるだろうか。そんなことをすれば、政府は1日で政権を追われるだろう。(政府の力が強い) 中国でもできないことだ。

たとえ禁止できても、二酸化炭素には約100年の寿命がある。明日にも化石燃料を燃やすのを禁止したとしても、地球の気温の上昇は止まらないだろう。

----ガイア理論は地球をシロアリの巣のような超有機体になぞらえている。ここでは個体の存続はコミュニティの存続に従属することになっている。人間がそのような無私の感覚をもちうるのだろうか。

人間はそこまで進化していないと思う。我々は肉食動物の一種族にすぎない。知恵を持った狼のようなものだ。人間がシロアリ並の生き方ができるようになるには、まだ多くの命を犠牲にしなければならないだろう。

----シロアリとハチが人間より進化しているということか。

ある意味ではそうだが、それは知性という点からではない。シロアリの巣はコンピュータになぞらえることができるかもしれない。その構成要素であるそれぞれのピット自身には、自分が何をしているのかという意識がないという点でだ。

----人類が地球に及ぼしてきた最大の危険とは何か。

それはまだ誰にもわからないと思う。だがはっきりさせておくべきことは、人類はこの惑星の存続自体には大した脅威を与えていないということだ。脅威を与えているのは我々自身の文明に対してであり、それに付随する家畜や農作物などの種に対してだ。歴史を振り返ってみれば、人類が地球に与えた影響など微々たるものだとわかるだろう。

----人類は確実に滅亡に向かっているのか。

困難な時代に突入しているとは思う。第二次大戦前のイギリスで私が感じたのとちょうど同じものをいま感じている。誰もが戦争に突入することはわかっていたのに、誰一人それを理由に生活を変えたりしなかったし、人生を楽しむのをやめようとはしなかった。ところが戦争が起きると、みんな一致団結して、最善を尽くしたのだ。

----第二次大戦では、数千万人が命を落した。

確かにそうだ。我々はまた同じことを経験しなければならないかも知れない。

----その大異変はどのように起きるのか。

人間の活動より数の面で起きるだろう。地球では二～三世紀おきに極めて大規模な火山の噴火が起きて、火山灰が二年ほど大気圏を覆ってしまうものだ。その間、穀物の収穫はゼロになる。それなのに世界の穀物貯蔵量はわずかに四五日分しかない。

だが、地球の見地ではこうした状態はごく普通の出来事なのだ。

----人類の絶滅は地球にとって損失になるのだろうか。

もちろんだ。なぜなら人類が絶滅したら地球について語り伝えるものがいなくなってしまう。だが私は、人類が滅亡するとは思わない。我々は、驚くほどタフな種なのだ。実際のところ、多くの人は人口が大量に減った世界のほうが、心地よいと思うのではないだろうか。

おそらく生き残った人々は、二度目の人生を与えられたように感じて残りの人生を精いっぱい生きようと努力するだろう。

<http://matsuda.c.u-tokyo.ac.jp/~ctakasi/first/06minj/gaia.html>